

1. 昨年行われたマスタークラスはいかがでしたか？

昨年の石オケへの訪問は、午後のクニト・インターナショナル・ユースオーケストラ（ユースオケ）のマスタークラスで始まりました。最初、美しいサロンスタイルの練習会場に感銘を受けました。それは19世紀の有名なヨーロッパの音楽スタジオを思い起こさせるものでした。家にいるような形式張らず和気あいあいとした雰囲気があり、かつ生徒たちはとても集中して聴きとても真剣に演奏する勤勉さを見せていました。国際色豊かな生徒たちによって練習場に素晴らしい多様性がありました。演奏やマスタークラスのため各国を回ると、国によって演奏スタイルが全く異なることに気づきます。ユースオケにおいては、世界各国から来た生徒たちがバックグラウンドを共有することで演奏スタイルや音楽に対する姿勢が混ざり合っているようで、それが知性的に、音楽的に、そして社会的に生徒たちをととても豊かにしていました。また、このような環境で生徒たちは国をまたいだ一生の友人関係を築くことができるでしょう。この上なく見事で圧倒されるような演奏が多く成されたことから、彼らの情熱と勤勉さはマスタークラスにおいて明確に見られ、それは非常に印象的でした。このような豊かな練習環境と多様なバックグラウンドの生徒の強い信頼感は、西谷氏の音楽家そして教育者としての素晴らしいスキルの賜物に違いありません。

夕方には石神井インターナショナル・オーケストラ（石オケ）と共に白熱したアンサンブルを行う機会を得ました。このグループはよく団結しておりユーモアのセンスを持って（これは音楽表現の上で私が最も重要で最も難しい要素の1つだと考えている）取り組んでいました。一緒に演奏する上で彼らとアイデアを共有できたことは素晴らしく、音楽が持ちうる解釈には無限の可能性があることを再確認しました。セッションの間に地震が起きましたが、この熱中が薄れることはありませんでした！

個人的なことです。私の妻（マリコ・ジャスミン・アラカワ）と私は西谷氏とその素晴らしい両親に出会えたことに感謝しています。彼らは、それは温かく受け入れてくれる host でした。私たちはまた、生徒の数人およびその家族と共に、美しい石神井公園を歩き、そして石オケの活動を献身的に支える石オケの演奏家とコミュニティの人たちに出会えました。6月に再会できることを心待ちにしています！

2. 5弦ヴィオラの特徴はどのようなものですか？作られた経緯は？

私は学生のと看ヴァイオリンとヴィオラの両方を演奏しており、その頃からこの2つの楽器を融合させることを企んでいました。加えて、ヴィオラをヴァイオリンと同じくらい弾きやすくすることができるのでは、と興味を持っていました。歴史的に、ヴィオラに5本目の弦を張る試みは、最も有名なところでは J.S. Bach, Niccolò Paganini、Hermann Ritter（バイロイト祝祭管弦楽団の初代主席ヴィオリスト）がいる。これらの試みは、当時の技術面で限界がありました。私は、発展した現代の技術、特に増強されたテンションと圧力に耐えられる弦と駒の製造技術、があれば、人間工学的に弾きやすい形でかつ良い音が鳴る、真に演奏に向いた5弦ヴィオラができると考えました（5弦の電子ヴィオラはすでによく知られていますが、アコースティックの5弦ヴィオラの製造はこれより遥かに難しいです）。私は、実験的な弦楽器制作を行う名高い職人 David Rivinus が、5弦ヴィオラを作るにふさわしい人だと白羽の矢を立てました。彼の非対称なデザイン、ヴィオラ製造における1行程1行程を考え直す姿勢、によって、音質も弾きやすさも損なわない楽器製造が可能になりました。その開発には数年かかり、2001年にやっと理想とするヴィオラが完成しました。ヴィオリストは通常ジレンマをかかえています：小さい楽器は扱いやすいけれど音も小さい、しかし楽器を大きくして音を大きくすれば演奏しにくくなります。David Rivinus にデザインしていただいたヴィオラは、非対称の形状にすることでこのジレンマを解決しました。このヴィオラはボディの最大幅が斜め方向に 50 cm あり、とても大きな音量を得ました。しかし演奏者の首から左手までの距離は小さいヴィオラと同等です。加えて、ボディのアップーバウツ右部の大きさはヴァイオリンのそれとほぼ同じで、ハイポジションへのシフトは用意です。5弦目加わったことで、通常のヴィオラから1オクターブ広い音域を得ました。当然、見た目は奇妙なものになり、聴衆に「日光に当たって溶けてその形になったんじゃないですか？」なんて言われたこともありました。しかし音と演奏のしやすさは私にとって理想的なのです。

3. 6月に石オケと共演予定の『5弦ヴィオラのための協奏曲』について聞かせてください

Jazz と fiddle スタイルから強く影響を受けた、4つの楽章からなるコンチェル

トです。

第1楽章は Possum Trot、これはイリノイ州のとある田舎道にちなんだ名前です。Possum とはオポッサム、カンガルーのような袋を持つ巨大なラットのような見た目のげっ歯類、の俗称です。オポッサムは臆病でのろまな動物ですが、びっくりすると非常に素早く走ります。このような特徴をこの楽章では表現しています。

第2楽章は Triathlon、これは1つのテーマと3つの”athletic な”変奏からなります。第2変奏では、私が大好きなリヒャルト・シュトラウスのティル・オイレンシュピーゲルから引用しています。

第3楽章は Hoedown、これはフィドル演奏とダンスを行う伝統的な収穫祭です。

第4楽章は Walpurgisnacht、これは年に1回魔女が集うドイツの伝説を基にしています。演奏者はこのコンチェルトの最後、魔女の甲高いおしゃべりと恐ろしい呪文を思わせる身の毛もよだつようなノイズを鳴らすことに尽力することになります。

4. 石オケとコンチェルトをやる意気込みを聞かせてください！

昨年の石オケとのセッションで私のコンチェルトを抜粋で何度か演奏した際、行うごとにどんどんエネルギッシュになっていくことに快感を覚えました。そして2016年6月にコンチェルト全体をやることを同意されたとき、さらなる興奮を覚えました。西谷氏が率いる国際的な石オケとの共演は、アジア初演となる私のコンチェルトの為にも理想的な演奏となる事でしょう！